

我々オハイオ州の女性は、世界中の女性たちの加盟を求めています。世界を救うために、新生児からお年寄りまで、あなたのお力が必要です。

シャロン・メデイ氏が五歳の孫娘のために書いた素敵な短編ストーリー「祖母ちゃんの素晴らしい静かな集会」から、我々は靈感が与えられました。

あるウェーターの男の子が働いているカフェテリアには、公園が見える窓があります。その公園に二人の老婦人が居まして、一日中立ち続けて、全然話したり動いたりしていないことを、ある日男の子が気づきました。老婦人たちは、自分の一番良いと思われる服を着ていて、市役所のほうをじっと見守っているほかには、何もしていませんでした。

男の子は可笑しくなって、店の人に聞いてみたら、いろいろな推測が出てきました。そして、ある五歳の子供がこう言いました。「あれは私のお祖母ちゃんなんだから、何をしてるのかわかってるよ。世界を救うためにそこに立ってるんだ。」それを聞いて、カフェテリアのみんなは騒ぎ出して大笑いしました。

仕事からの帰り道で、男の子は自ら老婦人たちに聞こうと決めました。そして、同じ答えが出ました。「世界を救ってます」、と。

夕飯のとき、男の子が親にその話をしました。お父さんは彼と一緒に笑ってましたけど、お母さんは完全に黙ってました。そして、御飯の後、お母さんは何人かの友達に電話しました。

翌朝、老婦人たちはまた同じところに現れました。そのみならず、男の子のお母さんも、お母さんの友達たちも、そして前の日にカフェテリアにいた女の子たちも一緒でした。皆黙って市役所のほうをじっと見てました。男の人たちはまた笑い出して、「公園に立つだけで世界が救われるもんか!」とか、「世界を救うなんて、それは軍隊が責任なんだよ!」とか、「公園に立つだけで何も救えないだろう。少なくとも看板やスローガンぐらいは出せよ!」とか、大騒ぎでした。

またその次の日、カフェテリアの女の子たちの友達たちも来ました。地方紙のある新聞記者はこれを見て、記事を書きました。その後、女の人は何人も来て、公園に立ってました。

彼女たちのすることがいかにも馬鹿馬鹿しく見えたから、市長はこれ以上町に恥をかけないように、彼女たちを解散させると警察に命令を出しました。しかし、許可がないから解散しろという警視庁長の命令を聞いたら、一人の女の人が言い返しました。「私たちはただ、この公衆の公園に個人的に立ってます。別にスピーチやデモをしてるわけでもないし、どうして許可なんか必要なんですか」と。警視庁長はその話を聞いてしばらく考えて、それは確かだなあと、公園を出て行きました。

結局、市長の奥さん、警視庁長の奥さん、そして一人の五歳の女の子を含めて、二千二百二十三人の女性が世界を救うために、その公園に立っていました。

2007年5月13日の午後一時に、我々と一緒に五分間立ちましょう。あなたの地方の公園で、学校の運動場で、集会の場所で、五分間の沈黙を守りましょう。仲間に入ってほしい男の方も誘ってください。この五分間のはじめに、そして終わりにも、鈴を鳴らしてください。その間の時間には、私たち一人一人の力で、そしてみんなの力をあわせて、この世界のためにどんなことができるのかを考えましょう。お腰をかけた方はもちろん、そうしてもかまいません。それから、どうやってこの世界を変えるのかを後で同伴者の方たちと話し合しましょう。

あなたの五分間は、次のことを伝えます。

我々は、世界中の子供たちと孫たち、それから七世代以後の子たちのために、立っています。我々の夢の世界には、綺麗な水、新鮮な空気、豊かな食物があります。その世界は、子供たちが義務教育を受け、健全な頭脳を発展し、健康に育つことのできるようなところでは、家という暖かくて安全で親しいところがあるところでは、家にも、近所にも、学校にも、どこにも暴力の影のないところでは、これが我々の夢の世界で、我々が立っている故です。